

[研究会報告]

「マレーシア華人の貢献と国家の発展」学術会議

篠崎 香織

2007年はマラヤ連邦がイギリスから独立して50年にあたり、マレーシアの独立50周年として認識された。全国民が一丸となって熱狂的に盛り上がるような雰囲気はなかったが、過去50年間の道のりを省みる試みが様々に行われた。

そのような試みの一つとして、「マレーシア華人の貢献と国家の発展」学術会議（“馬來西亞華人的貢獻与国家進展”学術研討会/Conference on “Malaysian Chinese Contributions and National Progress”）が、マレーシア中華大会堂総会、華社研究センター、マインズ・リゾートシティなどで知られる緑野集団（Country Heights）の共催の下、2007年10月6・7日にPalace of the Golden Housesで行われた。全体の進行・報告・質疑応答は全て華語で行われ、学生や一般市民など300人が参加した。開会式で林玉唐マレーシア中華大会堂主席が歓迎の辞を述べたほか、連立与党の構成党であるマレーシア華人協会（MCA）党首のオン・カーティン住宅・地方政府大臣が開会の辞を述べるなど、華人社会で指導的立場にある人びとの参加もあった。

“マレーシアの発展における華人の貢献”

参加者には報告原稿をまとめた論文集が配布され、その冒頭の趣旨説明にこの学会の目的は「マレーシアの国家建設および経済発展において華人が行ってきた貢献と犠牲を一般的に検討し、その歴史における地位と役割を公正に評価する」こととあった。

イェン・チンホアン(アデレード大学)による基調講演「華人の貢献とマレーシアの発展」はまさにそのような内容で、マレーシアの発展における華人の貢献を経済、文化、政治から論じた。それによると、すでに600年前から今日のマレーシアにあたる地域において華人は活発な経済活動を行っており、様々な規制が課された1970年代やアジア金融危機を乗り越えて競争力を高め、マレーシアが国際的な競争に対応するための基盤となっていた。またマレーシアの華人は自らの文化の維持に努め、華語を教授言語とする教育制度を確立したため華語を操れる人材が豊富で、中国の台頭が目覚しい今日の国際環境においてそうした人材がマレーシアにとって有用な資源になるとした。政治においては、19世紀から20世紀初頭にかけて中国を向いた多様な政治活動が生じたが、それは華人が政治を理解する場となり、戦後の華人の政治的覚醒と発展の下地となったと指摘した。今日のマレーシアには、華人の庇護者を自認する政党が連立与党の構成員となっているのに加え、華人の庇護者として認識されている政党が野党に存在し、チェック・アンド・バランスの役割を果たしており、それがマレーシア全体の政治発展に寄与しているとした。

ある国家に居住するある個人が、その居住国の外に自身の出自を迎える国家があると認識している場合、あるいは他者からそう認識されている場合、状況によっては出自先とのつながりを様々な形で維持しつつも、自分が現在居住している国家に対して帰属意識を持

ち、国民としての義務を履行している正当な国民であることを、「原住民」を主張する人に対して折に触れて確認させることがある。マレーシアの華人もそのような例に当てはまる。筆者は当初、上記のような趣旨の学会であれば働きかけの対象は華人以外のマレーシア人であるはずなのに、それにしては進行・報告・質疑応答が全て華語で行われるということ、学会の趣旨が果たしてどこまで反映されるのだろうかという疑問に思っていた。

### “華人の華人社会に対する貢献”

これに対し、基調講演に続いてテーマごと（教育、文化、政治、経済、社会）に行われた5つのパネルで論じられたのは、“マレーシアの発展における華人の貢献”というより、“華人の華人社会に対する貢献”であったと言える。これらのパネルでは、今日のマレーシアにおいて華人は国家の正当な構成要素として政府から十分な認知を得ているという認識が共有されたうえで、マレーシアにおいて華人がそのような地位を確立するに至った過程が論じられた。特にその傾向が顕著だったのは、教育と文化についてのパネルであった。

教育のパネルでは、華語教育制度の概要に関する報告<sup>1</sup>と、初等教育、中等教育、高等教育における華語を教授言語とした教育制度の展開に関する報告<sup>2</sup>が行われた。マレーシアの華語教育制度は、中国と台湾を除いて世界で最も系統だった制度であるとされ、いかにしてそのような制度が確立され、政府の認知を得てきたのかが論じられた。また現状の発展・改善を政府に対してさらに働きかけていくことが確認された。

これらの報告の中で、華語教育を華人の魂として讃える映像が流される場面があったが、今日の華語小学校では非華人の生徒の増加という状況も生じている。マレーシアでは高等教育に至るまであらゆるレベルで華語教育制度が確立しているため、それを通じて非常に高い華語の運用能力を備える非華人が現われる可能性がある。フロアからは、そうした人たちが華語教育業界に入ってきた時に受け入れるのかという質問が投げかけられたが、これに対して報告者たちは明確な回答を行わず、実際にはまだそのような状況は発生していないと回答したのみであった。

文化のパネルでは、マレーシアという国家の文化は単一の文化によって構成されているのではなく、多元的な文化によって構成されていることが今日では政府および社会によって認知されていることがまず確認された。そのうえで、マレーシアという国家の文化は多元的であり、華人の文化はその正当な一要素であることを活発に呼びかけた1980年代の華人諸団体による文化活動を評価した。その例として、1983年から毎年各州の中華大会堂が主催している「華人文化節」が着目された<sup>3</sup>。

教育と文化のパネルでは、過去50年間のマレーシアの変遷は以下のように捉えられて

---

<sup>1</sup> 安煥然 (Onn Huan Jan) “華教精神与華文教育”

<sup>2</sup> 黄雪玲 (Wong Seet Leng) “風雨悠悠晴空可待—記大馬華文小学教育的發展”、張曉威 (Chong Siou Wei) “華文中学教育的發展与对国家的貢獻”、林水[木豪] (Lim Chooi Kwa) “自強不息—大專華文教育的貢獻”。

<sup>3</sup> 黄文斌 (Wong Wun Bin) “華人与国家文化建設—以全国華团文化節以例案研究 (1984—2005)”、祝家豐 (Thock Ker Pong) “文化的韌性与生命力—馬來西亞華人文化個案探討”。文化パネルにおけるこれ以外の報告は、潘碧華 (Fan Pik Wah) “、文平強 (Voon Phin Keong) “文化与經、商活動—探討馬來西亞華人与国家進展的關係”。

いた。それはすなわち、(1) 開放的な 1950-60 年代、(2) マレー人／ブミプトラおよびその価値観が政治・経済・文化において政策の中心となり、様々な規制が導入された 1970 年代、(3) 規制が緩和され始め、非マレー人および非ブミプトラの声に政府が耳を傾け始め、華人諸団体の活動が活発であった 1980 年代、(4) 様々な分野において開放的な政策が進展した 1990 年代というものであった。こうした見方は、他のパネルの報告者にも共有されていた。

## 批判

以上の変遷に関して政治のパネルでは、1990 年代以降の華人諸組織・団体は現状肯定的となり、保守化したとの指摘が批判的になされた。

何啓良 (Ho Khai Leong) “公民政治之未竟之業—50 年来马来西亜華人政治参与”は、華人与党は華人の代表というより華人に対して政府の政策の妥当性を説得する立場にあり、他方で華人野党の改革運動は不徹底であると批判した。また華人組織は 1980 年代には政府に対して様々な要求を提出していたが、1990 年代以降は政府に取り込まれていると指摘した。潘永強 (Phoon Wing Keong) “双重任務—社会運動与馬華”は、華人は様々な社会運動を展開し、体制内外から政治に参加してきたが、1990 年代には社会運動の主体が政府に取り込まれて保守化し、同時代に現われた新興の社会運動は政府に認知されていないと指摘した。許徳發 (Khor Teik Huat) “承認的闘争与華人的政治困擾”は、マレーシアではマレー文化が覇権的であり、また国民としての権利は民族によって平等・同等とは言えず、政治的にもマレー人が覇権的であるとし、全ての市民の権利が平等である市民国家を設立すべきだと論じた。

批判的なトーンが強いこれらの報告に対して、会場は「何もそこまで言わなくても」という反応を示し、報告の相対化を試みたのが印象的であった。何啓良が、華人の意向を反映した政策の立案・遂行において、MCA の試みはことごとく失敗していると強い調子で批判したのに対し、MCA が設立したラーマン大学で中国文学を専攻している学生が質問に立ち、自分のような立場で教育を受けられる学生がいるのも MCA の失敗の結果なのかと質問した。また現在のマレーシアは、政治的・文化的にマレー人が覇権的であるとして強く批判した許徳發に対して、華人だけでなくマレー人もある程度忍耐しているとし、マレーシアは若い国家で完璧ではないため、皆で将来を構築していかねばならないというコメントが投げかけられた。

このほかに経済<sup>4</sup>と社会<sup>5</sup>のパネルが行われ、最後に何国忠 (Hou Kok Chung) が報告を総括し、2 日間の日程が終了した。今回の報告をまとめて出版する計画もあり、華語版を出したあと英語版の出版も検討するということである。

「マレーシア華人の貢献と国家の発展」と題する今回の学会は、マレーシアを多文化・

<sup>4</sup> 篠崎香織 “‘華人商務局’的成立—商業与貿易發展的催化因素”、甄義華 (Chin Yee Whah) “馬來西亞華人的商業活動—開拓海外市場与接受挑戰”、謝桂元 (Cheah Kooi Guan) “大馬早期華資銀行的崛起与没落”。

<sup>5</sup> 陳愛梅 (Tan Ai Boay) “巾幗建国—大馬華人女性經濟、教育及政治参与初探”、莫順宗 (Mok Soon Chong) “五十年不變?—論独立至今馬來西亞華人鄉团之困局与發展”、張集強 (Teoh Chee Keong) “華人貢獻的実証—大馬華人文化遺產保存概況”。

多民族国家に方向付け、華人をその正当な構成員として政府および社会に認知させた「華人の貢献」を、華人の間で確認するという内容となった。華人の意志が十分に反映されていないとされる部分は、華人の庇護者を自認する政党や諸団体の問題とされ、華人社会の枠内における問題提示となった。自らの貢献を非華人に示すこともなく、自己完結的に確認するという内容になったのは、国家の構成要員として華人が政府や国内の諸集団に認知されていることに対する揺ぎない自身・信頼があるからこそなのかもしれない。